

主日礼拝

2024年1月21日（日）

題 「喜びの時」

テキスト：ヨハネによる福音書2章1～11節

皆さん、おはようございます。

今日の聖書箇所には、イエスが、最初に行われた驚くべき出来事が記されています。それは、ガリラヤ地方のカナという村でのことでした。

◆カナでの婚礼

「1:三日目に、ガリラヤのカナで婚礼があつて、イエスの母がそこにいた。」。カナという町は、イエスが育たれたガリラヤ地方のナザレの町から北へ20kほどの所にあります。

そこで婚礼、結婚式がありそのお祝いの席にイエスと弟子たちも招かれていたようです。イエス母マリアも婚礼の席にいたことが分かります。

今日の聖書によれば、婚礼は、家族だけではなく、その村全体の喜びの時であつたと思われまふ。

式が終つてお祝いの食事が始まつたのです。ここで問題が発生したのです。その場所にいたイエスの母マリアが、イエスの所に来て、

3:ぶどう酒が足りなくなつたので、母がイエスに、「ぶどう酒がなく

なりました」と言つた。ぶどう酒が足りなくなるといふことは、当時は

大変なことだつたのだと思ひます。場がしらけ楽しい宴(うたげ)に水を指すような事だつたのかもしれまふ。このような事態は花婿側の失態になつたようです。

みなさんも大切な場面で何かややこしい事が起こる経験をされた方もおありではないでしょうか。緊急事態の発生です。

そこでイエスの母マリアは、とつさに息子であるイエスに言つたのです。

母がイエスに、「ぶどう酒がなくなりました」と言つた。この事態はマリアの責任ではないのですが、問題の解決をマリアは息子イエスに頼んだのです。イエスだつたらきつとどうにかしてくれるとの思ひもあつたのかもしれまふ。

4:イエスは母に言われた。「婦人よ、わたしとどんなかかわりがある

のです。わたしの時はまだ来ていません。」

しかし、イエスの返事は冷たいものでした。「婦人よ、わたしとどんなかかわりがあるのです。わたしの時はまだ来ていません。」このイエスのことば「わたしの時はまだ来ていません。」とは、ある聖書学者は「栄光を示す時」と語

っています。イエスが神の栄光を表す時、との意味だと思われます。

究極的には、神の栄光とは、御子イエスの十字架の死による罪の赦しであり、イエスの復活による永遠の命のことであろうと思います。またいつの日が、勝利者としてイエスが再び地上にその姿を表されるという希望の事柄があります。「ぶどう酒がなくなりました」。わたしは祝福された結婚式は、この世で神が与えてくださる「喜びの時」の先取りを表しているのではないかと思います。たとえば美味しい料理の味見ができる、その時、料理を作った人は料理が完成した時の味を想像できるのではないのでしょうか。

母マリアは、この緊急事態をイエスが何とかしてくれる、助けてくれることを疑うことなく承知していたようです。だから心は平安で落ち着いているのです。そしてマリアは召し使いたちに、「この人が何か言いつけたら、そのとおりにしてください、と言えたのだと思うのです。

わたしは、この場面で母マリアの肝っ玉の座った態度とイエスに対する信頼の深さと強さを思われます。

6:そこには、ユダヤ人が清めに用いる石の水がめが六つ置いてあった。いずれも二ないし三メトレテス入りのものである。そこには石の水がめあったのです。どこの家にもあったのだと思われます。

身体を清潔に保つため、当時のユダヤ教の宗教的な理由もあったでしょう。

ちなみに1メトレテスの量は今日で言えば、約39ℓと言われます。

水がめが六つといえ、その4倍ぐらいでしょうか。かなりの量です。

イエスは、マリアの気迫と「イエスなら何とかしてくれる、なんとかできる」との思いに、押されるかのように、召し使いたちに「水がめに水をいっぱい入れなさい」と言ったのです。召し使いたちは、かめの縁まで水を満たしたのです。母マリアのひたむきさがイエスに届き、その場がうるわしい葡萄酒のかほりに満たされたのです。

「求めよ、さらば与えられん。」との主イエスのことばを思い出します。

イエスが「さあ、それをくんで宴会の世話役のところへ持って行きなさい」と言うと召し使いたちはイエスの言葉に従って運んで行きました。

人間の力が尽きた時、神の子イエスの独占行動が行われ、神の恵が満ち溢れたのです。召し使いたちはイエスに言葉に従ったのです。

世話役がぶどう酒に変わった水の味見をすると、このぶどう酒がどこから来たのか、水をくんだ召し使いたちは知っていました。世話役は知らなかったのですが、イエスのことばに従って黙々と「水をくんだ召し使いたちは知っていた」のです。そして世話役は最後に言いました。

10:「だれでも初めに良いぶどう酒を出し、酔いがまわった所に劣ったものを出すものですが、あなたは良いぶどう酒を今まで取って置かれました。」と。

イエスによって、神さまの憐みの時が来て、その場所が喜びと感謝に包まれたのです。このようなことは、形は違っても現在においても家族の中、教会の歩みの中で、信徒のまじわりの中でも起こっていくのだと思うのです。

イエスは、この最初のしるしをガリラヤのカナで行って、その栄光を現されたのです。わたしたちも、人生で苦しい現実打ちのめされることもあります。がどんな時でもイエス・キリストを土台として、神さまの憐れみにすがりつつ歩む時、事態が変わり感謝に変わることがあることを覚えたいと願います。

皆さまの上に、主の平安を祈ります。